
3. 公園の視覚領域

公園に植えられている樹木が外部から見えることで、周辺都市と公園との間で視覚的な繋がりを生まれ、公園が近くにあることに気付く上で重要な働きをしている。こうした街路空間において公園が見える場所を、公園の視覚領域と呼ぶことにする。

公園が見えることは公園が近くにあることに気付く上で重要な働きをしている。

3.1 調査および分析の方法

公園の樹木が見える場所の調査を目測で行った。その結果、道路において公園が見える場所を塗りつぶすことで得られたものを、公園の視覚領域として取り出した。

次ページに、全ての公園の視覚領域を載せる。

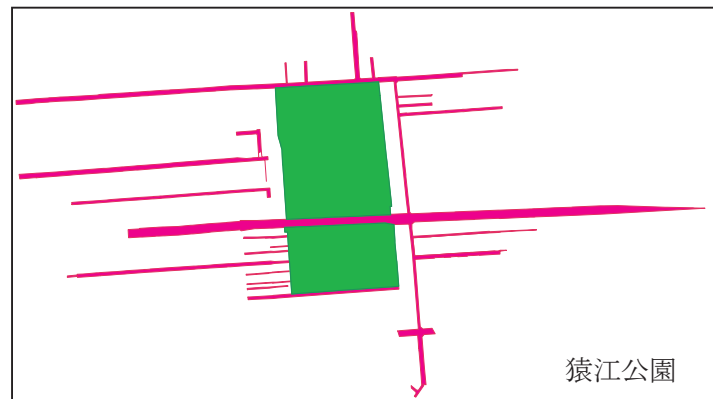
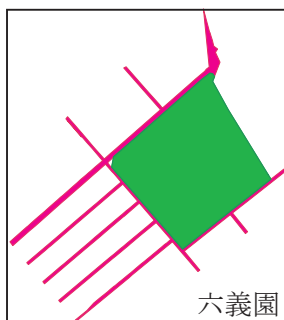
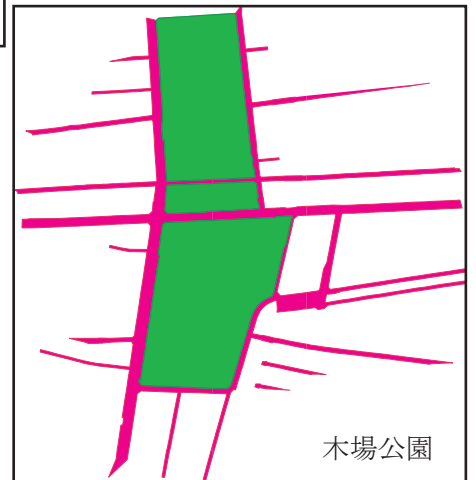
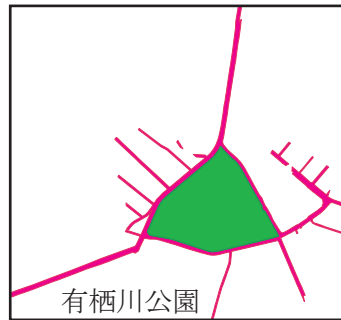
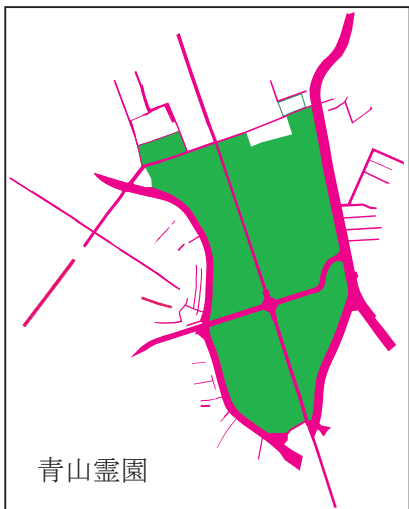
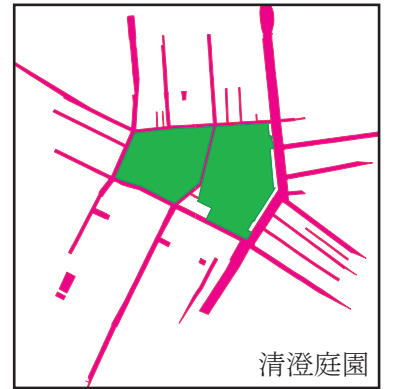
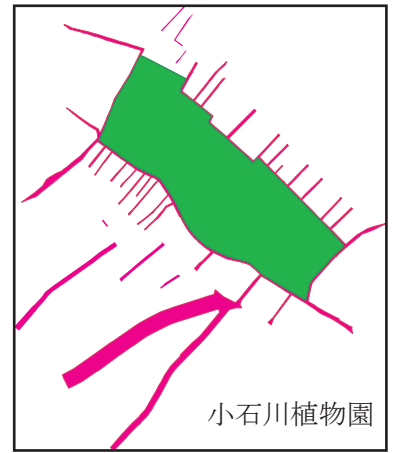
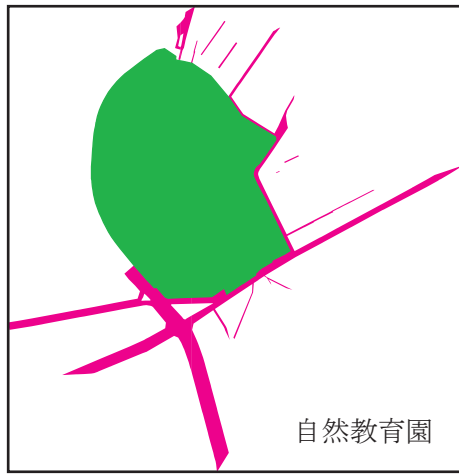
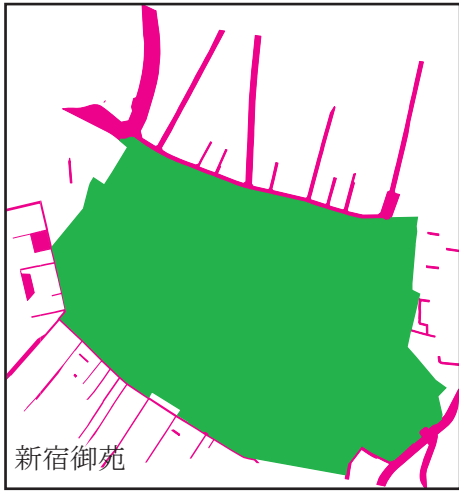


fig3.1 各公園の視覚領域の形
 s = 1 : 20000 (代々木公園のみ、1 : 40000)



公園の面積、周長、視覚領域の面積

調査地として選ばれた各公園について、面積、周長、視覚領域の面積について表にして示す。

面積、周長、長形態指数のどれと、[視覚領域の面積／公園の面積] とに相関関係はもなかった。

公園名称	面積 (㎡)	周長 (m)	視覚領域の面積 (㎡)	形態指数 ^(*) ($4\pi \times \text{面積} / (\text{周長})^2$)	視覚領域の面積 ／公園の面積
新宿御苑	593368	3301	77751	0.68	0.13
代々木公園	1237129	7083	152276	0.31	0.12
青山霊園	263009	2922	83645	0.39	0.32
有栖川公園	67131	951	31210	0.75	0.58
自然教育園	237889	1929	68604	0.80	0.29
芝公園	122501	4608	136761	0.07	1.12
小石川植物園	161588	1943	56021	0.54	0.35
六義園	87809	1280	28123	0.77	0.28
清澄庭園	81091	1635	125103	0.38	0.55
猿江公園	1450088	2173	79838	0.39	1.54
木場公園	264568	3228	131226	0.20	0.50

fig3.2 調査した公園の形態と視覚領域の比較

(*) 形態指数とは、図形の複雑度を示す指標で、 $4\pi \times \text{面積} / (\text{周長})^2$ という式で計算する。その図形が円るとき形態指数は1になり、図形が複雑になるほど0に近づく。

3.2 公園と幹線道路^(*)

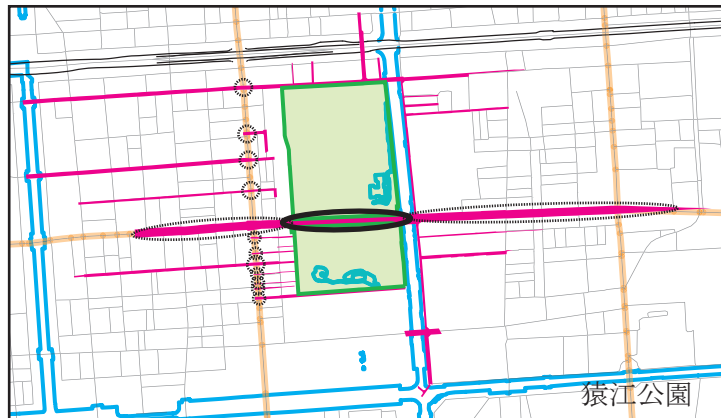
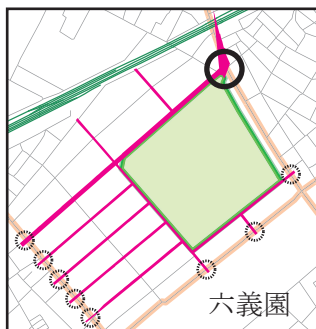
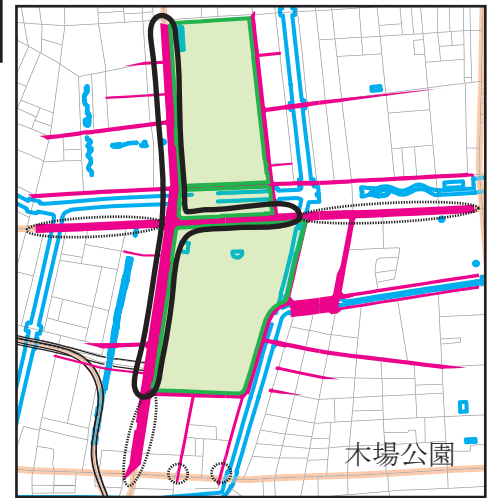
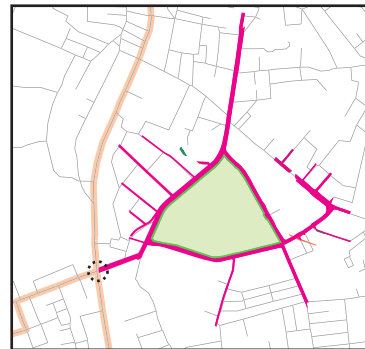
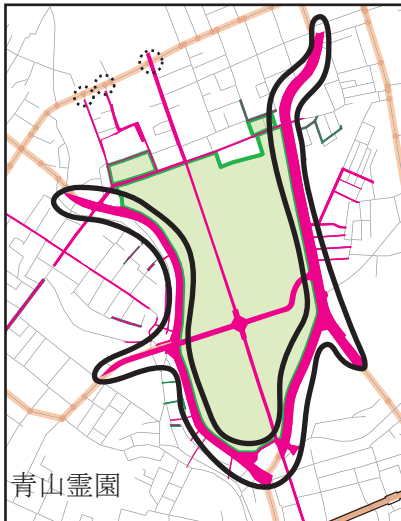
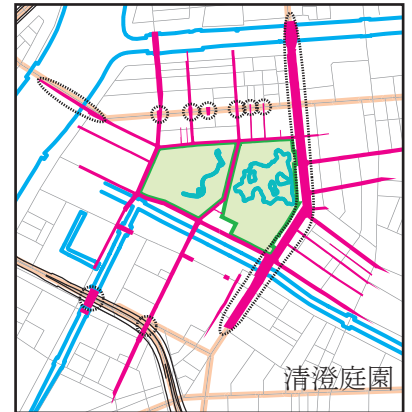
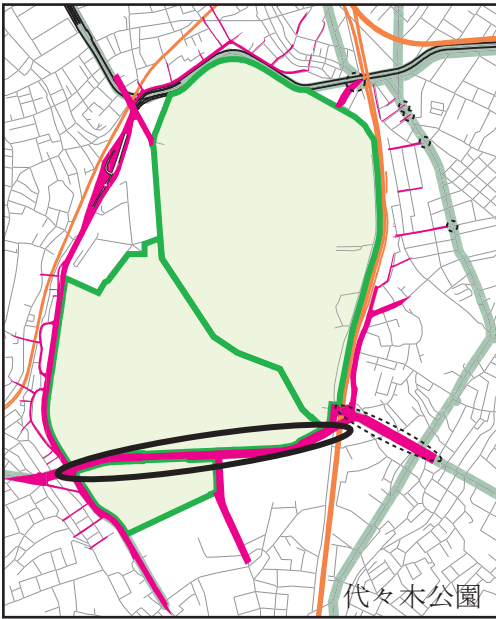
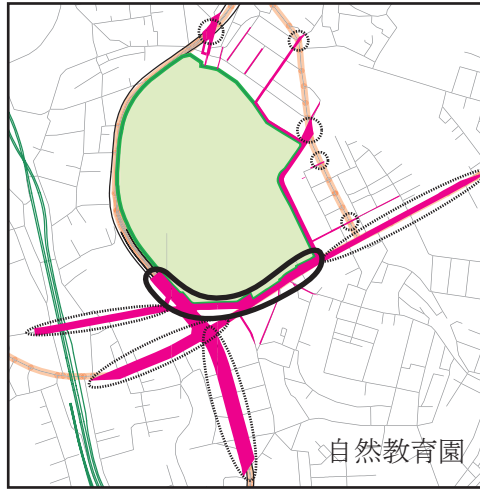
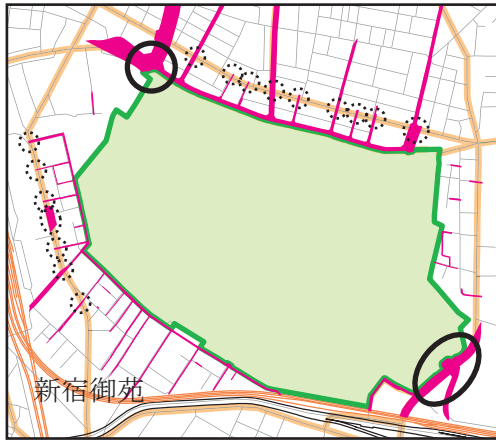
幹線道路はK・リンチの定義によればパスとして、私達が都市をイメージするときの基本要素となっている。自分が住んでいる場所の近くではない場所を訪れるとき幹線道路を移動することが多い。ゆえに公園が幹線道路から見えることは、公園の存在に気付く上で重要だと考え、

1. 公園が幹線道路に面していること
 2. 公園の視覚領域が幹線道路まで到達している
- の二つのレベルから公園と幹線道路の関係について見る。

幹線道路と直接面していることについて、半分以上の境界が面しているのが3/11、貫通する道路でのみ面しているのが2/11、幹線道路と入り口付近でしか面していない公園が3/11、面していないものが3/11、となり、ほとんどの公園が部分的でしか面していない。

1, 2のいずれかでも公園の全ての方角について幹線道路と繋がっている公園は青山霊園と芝公園しかない。半分以上の境界が1, 2のいずれかで幹線道路と繋がっているのは、5/11である。これより、公園は幹線道路と繋がりをもっていない傾向にあり、隠れた場所にあるといえる。

(*) 幹線道路とは、本来は機能による道路の区分でトリップ長が長く、交通量が多い道路のことをさすが、本論においては国道、都道を指す。



実線：公園と幹線道路が面している
 点線：幹線道路まで視覚領域が到達

fig3.3 各公園と幹線道路の関係
 s = 1 : 20000 (代々木公園のみ、1 : 40000)

